関西自然保護機構会報 21 (1) : 1−3, 1999

巻 頭 言

植栽樹木と管理

KONC副会長 菅 沼 孝 之

景気の良し悪しにかかわらず，大規模造成が進んで，この国全体が様変わりしている。湿地や海域の埋め立て，山を削り谷を埋めた工事は，地形だけではなく，気づいたときには多くの植生や，その植生を構成している多くの植物を失っている。豊富な降水量にめぐまれたこの国では，放置しておいても裸地には，草が生え，樹木が生長して何時の間にか森林ができてしまう。言い古されたことではあるが，これが植物に対して無感覚になってしまい，裸地を造成しても樹木を植えたら緑化できると思い込んでしまう。また，樹種は工事担当者の好みがはいったり，手に入りやすい苗木が使われたり，その時代の風潮に流されて決まることが多い。

植栽する樹種は慎重に選ぼう 昭和の始めに県外視察の際，佐賀県でナンキンハゼを見た当時奈良県観光課長であった坂田氏が，葉の形と紅葉の美しさに魅入られて，東大寺大仏前の浮雲公園や県庁前の公園樹，街路樹として導入した。今では市内に植栽されているナンキンハゼのうち最大木に生長している。ところが，この木の生長は極めて早いことと，さらに，白い蝋を被った種子は鳥類の餌となり，鳥によって種子を広く散布して生育範囲を著しく広げている。

ナンキンハゼを特別天然記念物に指定されている春日山原始林で見かけるようになったのは，第2室戸台風が吹きすさんだ翌年であった。その後も春日山では風倒木がでるとその跡にいち早くこの木が芽生え，さらに鳥散布されて広がっている。もっともナンキンハゼを奈良公園に導入したのとほぼ同時期に完成した春日山周遊道路の道沿いに，イロハモミジを植えたが，ナンキンハゼを植栽しなかったのはせめてもの慰めといえる。しかし，現在では春日山周遊道路に隣接する新若草ドライヴウェイの周辺に大量に芽生え，ちょっとしたナンキンハゼ林ができ，若草山の北側に迫っている。

今一つ，春日大社境内一円に純林状に生育しているナギが，春日山原始林内で増えていることがあげられる。ナギは春日大社創祀に際して献木されたものとされ，その後，シカが食べないばかりではなく，ナギに不都合な樹種をシカが食害して，ナギを有利にみちびく，耐陰性がある，アレロパシー現象をもつ，などの特性がナギの繁殖力にプラスし，純林をつくりあげた。このことについては，本誌15号（1988）に「春日大社境内ナギ林の生態」にまとめたが，その中で，ナギの勢力拡大については，種実が台風によって飛ばされて春日山山中に散布したのではないかと推測した。この仮説は，1998年9月22日に台風7号が吹きすさんだとき，ナギの種実が枝葉とともに飛散するのを見たと，奈良の鹿愛護会理事長小船武司氏から聞いた。このまま放置すると，シカの助けによって，春日山中は春日御蓋山と同じようにナギで占められる日もそう遠くないのではないかと心配している人が多い。

植えた木には最後まで水の管理の手を つぎは植

栽された木がかわいそうであるということである。植栽にあたっていちばん意を払ってほしいと思う植栽地の環境条件が無視されることが多い。まず目に付くのが，植えるだけで後の管理には無関心であることである。

年に数回通うシンフォニーホールへの道で，見かけたことであるが，大阪JR環状線福島駅近くの阪神高速道路福島ランプ高架橋の下に植栽された樹木が，炎暑の夏に水がもらえず，まず低木のアセビが枯れた。つづいて，モッコクやヤブツバキなどの小高木も茶色に変色した。雨水もかからぬ高架橋の下で，水をやれぬようでは植えるべきではない。福岡市内の高架道路の下で同じような植栽があったが，ここではスプリンクラーが設置されてそれなりに青々としていたことを思うと，雲泥の差を感ずる。大阪市の福島ランプでは，あまりにも殺風景なのを何とかしようと緑化を試みたが，係りが変わって，後任者が無関心であったからではなかろうかと推測している。それにしても枯死した木が4，5年たってもそのまま放置されているが，早く処置してほしいものである。

木を枯らすというのは，公共の地だけに限ったことではない。奈良市の高級住宅地といわれる地区で個人の屋敷の石垣上に列植されたサツキが大量に枯死しているのが見られる。家主の注文によるものか，それとも設計（造園）業者の好みによるものかわからぬが，一街区のほとんどの人家が石垣上の塀にそってサツキを植栽していて，家主がどう管理しているかが列植されたサツキに表れている。一列に並んで開花したサツキが美しい家と，ほとんどが枯れて残った数本が枯死前の状態を想像できる屋敷もある。

乾燥と反対に湿潤すぎて木を枯らすことがある。前に勤めていた天理大学には，1991年に新築されたロ字型の研究棟がある。この棟の内庭に，里山的な樹相をもった庭園が設計された。ここでは雨水は浸透によって逃げるはずが，校舎建築の際に活躍した重機の踏みしめによって不透層ができて，水のはけ口がなくなり，降りつづく五月雨に何本かの大きい樹木を枯死させてしまった。乾燥つづきなら潅水すればよいが，同じ読みである冠水にあうと，植物は3日で枯死してしまう。雨中スコップで枯れた木の周辺を掘ってみたら地下水位が高く，地表近くにあってびっくりした。研究棟周辺でも植栽された高木のクスノキが4，5本枯れたのに心痛む思いであったが，意にとめる人が少ないのも悲しいことであった。

いずれにしても，「管理覚悟で植樹しなさい。」「樹木も生き物，とりわけ水の管理を忘れないで。」といいたい。

樹木の性質を考えて植栽しよう　気になることの第二は，公園樹でも街路樹でも樹木の将来の樹形を考えずに植栽していることである。植栽して10年後，20年後にどのような樹形を望むかということが考えに入れられていない。一般に植栽する時点では，苗木または植栽木の大きさを勘案して，出来上がりがみすぼらしくないように近接して植栽しているが，これがあだとなって，地下部も地上部も生長が制約され，その木，本来の姿が失われて「もやし」状に育つ場合が多い。同じ種類の木を植栽した場合，密植すると淘汰されて適切な密度になるというが，苗木に極端に優劣がない限り「もやし」状に生育してしまうことが多い。この方法であると植栽本数が多くなり，無駄になる苗木の量も多く，後の諸経費がかさんでくる。それでも一斉に育ってくれると，間引きようがあるが，生育が不揃いになると，間引きがむずかしくなり，なかなか思うようにはいかないものである。当初見てくれが悪くても10年，20年後の樹形を予想して，無駄がないように植栽できないものであろうか。

新聞で読んだが，「……に原始林を作ろう」といきまいている人がいるという。広さは知らぬが，また，どこであったか忘れたが木を植えて，原始林に育てようというのである。原始林の意味がわからないのは悲しいことであるが，よしや成林しても，500年先，1000年先にその時々の人々が，真の原始林か，偽の原始林か，真偽をつかめないようでは困る。現在，残されている原始林，あるいはそれに近い森林を保全することこそが大切なことである。わが国の現在の植生は，まやかしにしても原始林を作らなければならぬほど貧弱化しているとも思えないのであるが。